

『大正幽霊アパート 鳳銘館の新米管理人』

竹村 優希／著 KADOKAWA（2021年）

鳳^{おおとり}爽^{そう}良は強い靈感を持っていたが、そのことを誰にも言えず生きてきた。生きづらさを感じていたある日、疎遠になっていた祖父の庄之助が亡くなったと連絡が入り、そして遺言状が届いた。その内容は、鳳^{ほうめいかん}銘館を相続してほしいというものだった。鳳銘館は代官山にある、大正時代の華族の洋館を改装した美しいアパートだったが霊も多く住み着いている。そして住人全員が霊を視れる体質である聞き、相続することに決める。爽良は謎多き住人たちの奇妙な事件に巻き込まれていく。



『大正箱娘 見習い記者と謎解き姫』

紅玉 いづき／著 講談社（2016年）

時は大正。隆盛を極める帝京新聞の三面記事のうにも怪しい記事を任される英田^{あいだこん}紺は、可愛い顔をした十七歳の新聞記者です。紺が頼りにするのは、箱屋敷に住まう箱娘^{えこういん}回向院うらら。長い黒髪に大きな瞳のたいそう美しい娘です。うらは、紺が関わる箱を伴う事件を「開けぬ箱もありませんし閉じれぬ箱もありませぬ」と解き明かしていきます。大正という新しい時代になりましても都会と田舎の隔たりは大きく、女性はまだまだ生きにくい時代であります。箱娘と紺のちょっと不思議なお話です。



『大正浪漫 YOASOBI「大正浪漫」原作小説』

NATSUMI／著 双葉社（2021年）

時^{とき}翔の机に突如現れた不思議な手紙。そこには『百年後』という文字とその下に箇条書きでこんな道具があったらいいと思うものが書かれていた。どうやら100年前の同い年の千代子を書いたものらしい。例えば洗濯機や自動で風呂が沸くことなど。令和の時代を生きる時翔には当たり前なのが、大正の時代にはまだない。当然スマホもエアコンもない。最初は話がかみ合わなかったが、文通を続けるうちに二人の距離が縮まっていった。この作品はタイトルにもあるように、YOASOBIが楽曲化した原作としても有名ですね。



『開化の殺人 大正文豪ミステリ事始』

中央公論新社／編 中央公論新社（2022年）

この本は、大正期文壇で活躍した作家たちのミステリを読むことができる贅沢な1冊です。表題作にもなっている芥川龍之介の「開化の殺人」や、田山花袋の「Nの水死」など、有名作家の作品が全部で9篇収録されています。

普段から大正期の文学に親しんでいる方も、誰の作品から読んでいいのかわからないという方も楽しめるのではないのでしょうか。ぜひ、お気に入りの1篇を探してみてください。



『名探偵の生まれる夜 大正謎百景』

青柳 碧人／著 KADOKAWA（2023年）

名探偵・岩井三郎の事務所に弟子になりたい、と平井太郎が押し掛けた。あまり乗り気ではない三郎は、指名手配中のインド人の行方を探し出せ、と太郎に無理難題を言い渡す。太郎は、去年の暮れからカレーの匂いをさせはじめたパン屋・中村屋に潜伏していると推理し、潜入捜査を開始する。（「カレーの香る探偵譚」）を序章とし、野口英世、芥川龍之介、与謝野晶子、平塚らいてうなどの著名人が登場する大正時代を舞台にした短編ミステリー小説、全8篇収録。



『明治・大正のかわいい着物モスリン』

似内 恵子／著 誠文堂新光社（2014年）

モスリンは、薄手の平織り生地のこと、明治以降、大人気となりました。この本では、そんなモスリンのかわいい柄が豊富に紹介されています。写真はフルカラーで、柄を大きく拡大しているページもあり、1つ1つの柄に解説もついています。眺めているだけで十分楽しめる本書ですが、モスリンの歴史や、モスリンができるまでの工程についても書かれています。モスリンの知識を深めながら、かわいい柄に癒されてください。

